

# け や き



## 能動的で持続的な学びを求めて

大仙市教育委員会 教育長 三 浦 憲 一

文部科学大臣は昨年の11月20日、学習指導要領の全面改訂を中央教育審議会に諮問しました。これまでの「教育目標・内容」の見直しだけでなく、「育成すべき資質・能力」や「具体的な学習・指導方法」についても検討を要請しています。

また、中央教育審議会は昨年12月22日に「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花咲かせる～」を答申しました。

近年、子どもたちを取り巻いている社会環境が大きく変化し、それに連動して、社会が求める人材の質も変化しております。

高度経済成長時代は製造業など第2次産業中心の人口増加の時代で、教育面でも質の高い労働力を育成するための施策が展開され、均質的で、正解を速く効率的に答える力が求められました。

21世紀に入って人口減少の時代に入り、国境を越えて人材が流動化する変化も見られます。異なった文化をもつ人たちのコミュニケーションを図り、グローバルに活躍する人材が望まれています。また、高度経済成長時代とは違って、新しい発想や創造性をもつ人材が求められ、答えのない課題に対して解決策を自分たちで考えていくチャレンジ精神をもった人材育成も急務となってきております。

現状を見たとき、日本の子どもたちは、学ぶ意欲や表現力などが不足しているともいわれています。また、点数は高いがその教科が嫌いだったり、将来役立つと考えていなかったりするところがあり、内発性が不足した「強いられる学習」の感が強いともいわれております。

学ぶこと自体の喜びや面白さを感じさせるような学び方を体験すること、こうした知的好奇心を満たしたり、社会生活との関連の中で学ぶことの意義を認識したりすることが学習意欲の喚起（歓喜）につながります。それによって自己教育力が身に付き、生涯にわたって学び続ける人間になれるのだと考えます。

そのための努力はしてきておりますが、一層学習の在り方を進歩させていかなければなりません。今後は問題発見解決型の「プロジェクト型の学習」や、お互いに意見を言い合うような「ディスカッション型の学習」など、「アクティブ」でかつ「インタラクティブ」（相互作用的）な、つまり自律的でかつ協働的な学びを一層具体化できることが必要になってきます。

それが小・中・高と継続した学びにつながれば、大学入試改革にも十分対応でき、将来の仕事にも生かせる力を身に付けることになるのではないのでしょうか。

大仙市では学力の三要素（「学習意欲」・「知識・技能」・「思考力・判断力・表現力等」）を踏まえ「主体性・多様性・協働性」を重視した「総合的な学力の育成」を目指して取り組んできました。「生き抜く力」「自立した人間」の育成を目指し、学校、家庭、地域が連携し「キャリア教育」をメインに据えて着実に前進しております。

学力面や運動能力面でも安定した力を付けておりますし、個人的なスポーツ、文化面での児童生徒の活躍はたくさんあります。学校や地域の特色を発揮して全国大会出場や、大曲中学校のマーチングバンド中学校日本一5連覇をはじめ、合唱での全国銀賞、小学校では花館小学校の全国金賞、大曲小学校の銀賞の栄冠と活躍を見せてくれました。

また、地域に開かれ、他校種間や地域と一体となった教育実践活動が認められ、コラボスクールとして太田南小学校が文部科学大臣表彰を受賞しました。併せて、生徒の自立を目指し各機関や校種と連携して職場体験やあいさつ運動を実践するなど、組織的・系統的キャリア教育の充実に顕著な功績があったとして、協和中学校も文部科学大臣表彰を受賞しました。

さらには、国の研究指定校として国語、英語（オールイングリッシュ授業）の言語活動をメインにアクティブ・ラーニングに積極的に取り組んだ中学校。外国語活動を積極的に取り入れた元気のよい小学校。同様に国の美術科の研究指定を受け、小・中・高・大と連携し表現活動を磨き上げた中学校。防災教育や被災地交流を積極的に取り組んだ教育実践等々、将来を見据えた教育実践が多く展開されていることは大仙市の特色でもあります。大変心強く今までの努力に感謝しながら、今後とも個の存在を生かしつつ、一体感で新しい方向に向かって進んでくれることを期待します。



豊川小学校 英語教員乗り入れ授業  
小・中連携実践研究モデル事業（県指定）

## 生きて働く「国語」の力

大仙市立大曲中学校 教諭 米澤 孝子

### 1 はじめに

本校国語科では、「生徒が主体的に言語活動に取り組みながら、『対話』を通して思考・判断・表現する単元構成の工夫」という研究主題を設定し、実践研究に取り組んだ。

### 2 研究の概要

#### (1) 研究の内容

- ① 単元を貫く課題解決的な言語活動を取り入れた単元づくり
- ② 思考力・判断力・表現力等を高めるための指導の工夫

#### (2) 研究の視点

研究を進めるに当たり、次のような視点を明確にし、全教科で共通理解を図りながら進めてきた。

- 生徒に「付けたい力」とは何か。
  - ・生徒が将来の社会生活で、生きて働く力として発揮できるもの
- 「単元を貫く課題解決的な言語活動」は具体的にどんな活動を指すのか。
  - ・生徒の興味・関心が高まり、生徒自身が見通しをもちながら主体的に取り組める活動

さらに、評価規準や効果的な学習活動の流れについて、単元構想表を活用して取り組んだ。「対話」を取り入れることや学校図書館との連携の推進（レファレンスサービスの活用）についても確認し合った。特に、「対話」については、国語科として次のように考えた。

#### ○本校国語科の「対話」をどう捉えるか。

- ・1対1、3～4人のグループ、自問自答の自己との対話を含む
- ・話合いを通して新たなものの見方や考え方をつかむ



### 3 研究の実践例〈3年生〉

#### 単元名

「新聞記事から社会を見つめる  
～多面的に記事を読み取り、

新聞を読むことについて考えよう～」

（ある日の新聞を丸ごと読み、関連記事を比べ読みする学習。）

### 4 成果と課題

成果の一つ目は、「単元構想表」を活用したことである。これにより授業づくりの効率化と国語科教員の共通理解が図られた。二つ目は、「対話」を取り入れたことにより、生徒の思考に深化が見られたことである。三つ目は、学校図書館と連携することによって資料が充実し、言語活動の幅が広がったことである。

課題としては、個やグループの考えを全体で比較検討し、広げたり深めたりする教師の関わり方が挙げられる。また、つまづきが見られる生徒への適切な支援についても検討が必要である。

## つながる実感をもって 豊かに表現することを目指して

大仙市立西仙北中学校 教諭 瀬田川 恵子

### 1 はじめに

今年度本校は、標記指定を受け、「自ら表したいことを見付け、豊かに表現する生徒の育成～美術が実生活とつながる実感をもたせ、生きて働く力を身に付けさせる指導の工夫～」を研究主題として、全校体制で研究を進めてきた。

### 2 研究の概要

#### 【研究課題】

美術科において育成する資質や能力と学習内容との関係を明確にし、「A表現」及び「B鑑賞」の相互の関連を図ることで、生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する指導方法等の研究

#### 【研究内容】

- ① 美術科で育成する資質や能力が段階的に高まる、3年間を見通した指導計画の作成
- ② 指導と評価が一体となった学習活動
- ③ 生徒の実態や課題を踏まえた地域題材の開発及び実践と成果の検証
- ④ 表現と鑑賞の活動相互の関連及び言語活動の充実を図った授業の構築

#### 【具体的な研究活動……第2学年】

- ・地域社会とつながる実感をもちながら、自分の表したいことを見付けられるような題材開発
- ・日本の伝統文化を様々な視点から考える鑑賞
- ・日本の伝統文化である和菓子に、地域のよさや美しさを盛り込んで創作する表現活動
- ・「学び合い」（本校の授業における共通実践事項）につながる言語活動の充実を図る授業の構築



### 3 まとめ

#### 【成果】

- 発達の段階を考慮し、3年間を見通した年間指導計画を作成したことで、生徒の学びに深まりが見られ、自分の経験や前時とのつながりから主体的に思考を深める姿が見られた。
- 地域の特色を盛り込んだ題材設定により、生徒は題材を自分のものとして捉え主体的に取り組んだ。

#### 【課題】

- 年間指導計画は、更に題材を資質や能力の視点で見直し、他教科との関連も一層考慮していく。
- 活動内容や指導方法を明確にし、生徒の発想や構想の能力を高めるための手立てを精選していく。



小・中連携実践研究モデル事業（県教育委員会）

「中1ギャップ」緩和を目指して

大仙市立豊成中学校 教頭 三浦 健誠

1 はじめに

豊成地区では、今年度から2年間、秋田県教育委員会から「小・中連携実践研究モデル事業」の指定を受け、「小・中連携による小・中学校の円滑な接続と中1ギャップの緩和及び小学校における専門性を生かした授業の推進」を研究テーマに掲げ研究を進めてきた。



2 研究の概要

【課題】

- ・小規模の小学校の固定化された人間関係が影響し、他と関わろうとする意欲や自己肯定感が低い。
- ・中学校入学時、小学校との指導方法の違いに戸惑い、学習意欲が低下する生徒がいる。
- ・小学校では、学級担任の教科の得意不得意によって学力の状況に差が生じる傾向が見られる。

【研究の重点】

小学校と中学校の双方向の乗り入れ授業の実施や、小学校での教科担任制の積極的な推進、小・小連携、小・中連携の一層の充実を図る。

【主な実践】

- 中学校から小学校への乗り入れ授業
  - ・外国語活動（学級担任、中学校英語科教員、ALTとのTT授業）
  - ・体育（学級担任、中学校体育科教員とのTT授業）
  - ・音楽（中学校音楽科教員による全校合唱指導）
  - ・技術（中学校技術科教員による情報モラル教室の開催）
- 小学校から中学校への乗り入れ授業
  - ・数学（中学校数学科教員、小学校元6年生担任との中学校入学期におけるTT指導）
- 小・小間の交流
  - ・社会科見学、芸術鑑賞、宿泊体験学習、地層見学、外国語活動等



- 小・中間の交流
  - ・アルミ缶回収などの奉仕活動
  - ・小学校でのあいさつ運動
  - ・小学校の総体激励会への参加
  - ・小・中連携いきいき交流会

3 まとめ

【成果】

- ・中学校教員とのTT指導や、小学校教員の専門分野を生かした教科担任制の実施で、児童の学習意欲が高まった。
- ・中学校教員に、9年間を見通した系統性のある学習指導や、生徒側の思いや考えを生かした授業改善への意識の高まりが見られた。

【課題】

- ・小・中教員間の連絡調整や授業の打ち合わせの確保等、体制を整える必要がある。
- ・豊成地区3校の共同研修や校内研修を充実させ、「中仙モデル」を基盤とした9年間を見通した学習指導の在り方について共通認識し、実践を積み重ねる。

外部専門機関と連携した英語指導力向上事業（文部科学省）  
「拠点校・協力校英語授業改善プログラム」事業（県教育委員会）

スピーキング活動の充実と  
発問力の育成を目指して

大仙市立大曲中学校 教諭 菊地 裕之

協力校 大仙市立大曲西中学校・大仙市立大曲南中学校  
大仙市立大曲小学校・秋田県立大曲農業高等学校  
秋田県立大曲工業高等学校

1 はじめに

本校は平成24年度に、文部科学省より「外部機関と連携した英語指導力向上事業」（「拠点校・協力校英語授業改善プログラム」県事業）の指定を受け、研究を継続して3年目を迎えた。そして、近隣の小・中・高の協力を得ながら授業改善に取り組んできた。

2 研究の概要

(1) 研究主題

4技能の総合的な育成を目指した授業づくり

～自分の気持ちや考えを

積極的に発表しようとする生徒の育成～

(2) 課題

生徒同士による英語の発話量を増やすことと、フォーマットのバリエーションを増やし、生徒による表現力の向上を目指すこと

(3) 今年度の主な取組

①「フォーマット」を基に、スピーキング活動を充実させる

本校では英文を読み、理解した内容に考察を加えて相手に伝える活動に取り組んできた。基本のフォーマット（A「事実」→B「イメージ」→C「感情」→D「行動」）に基づいて表現する方法である。

今年度の新たな取組は、單元ごとに変わる題材内容に沿って、フォーマットにも変化をもたせたことである。「理由」を述べたり、「例」を挙げたり、「比較」して表現したりと基本フォーマットをより発展させて活用できるよう取り組んできた。

②発問力を育成する

自分の考えを発信するだけでなく、相手の内容に関わりのある質問をする活動を取り入れ、発展的なコミュニケーション活動を目指してきた。

3 成果と課題

今年度は、相手の発表に関して質問をするという活動に踏み込んだことで、発表を聞く意識が高まりが見られたことが成果として挙げられる。反面、質問内容を瞬時に考えることや発表内容に応じた質問をすることは、生徒にとって容易なことではない。

身近な話題を基にしたペアでのQ&A活動の継続を図りながら、生徒同士の英語でのやりとりの内容が充実することを願い、今後も研修を重ねていきたい。



キャリア教育

文科大臣表彰 平成26年度キャリア教育優良学校

「協和ism」から「協和Pride」へ

大仙市立協和中学校 校長 藤本 竜伸

本校は、平成18年度に文部科学省指定の「キャリア教育実践プロジェクト」をスタートさせ、以来、全校のモットーを「大志行深」として、キャリア教育を特色ある教育活動に据えて取組を重ねている。

5日間の職場体験活動では、毎年20以上の事業所のご協力をいただき、生徒の望ましい職業観の育成の場になっている。活動後には、本校で独自に作成した評価カード（事業所・保護者・生徒）を基に、自己理解・自己管理能力の向上を図るとともに、生徒自身のその後の生活改善に役立てている。

また、地域住民への取材学習を試行し、「協中生に寄せる期待」の声を集約して、郷土協和との接点を意識したキャリアアプランニング能力の育成に努めている。さらに、地域住民との交流活動やボランティア活動を積極的に進め、人間関係形成・社会形成能力育成の一助としている。

そうした実践が認められ、この度文部科学大臣表彰を受賞することとなり、本校の歴史に輝かしい1ページを加えることができた。



地域と連携した特色ある活動

文科大臣表彰 平成26年度優れた「地域による学校支援活動」推進

成果をかみしめ、一層前へ！

大仙市立太田南小学校 校長 小笠原 重夫

本校では、「連携・協働」をキーワードにした「コラボ・スクール」づくりを推進することにより、子どもたちの夢や挑戦心、高い志を育てようとしている。

コラボには、煎じ詰めれば、園・小・中・高・大との「縦のコラボ」と、家庭・地域・関係機関等との「横のコラボ」がある。

縦のコラボでは、太田中の被災地交流と連動した活動や秋田大学での理科実験授業、大曲農業高等学校太田分校との農園活動等を行っている。今年度は、小・中9年間を見通した「太田型家庭学習の手引き（児童生徒版・保護者版）」も発行した。

横のコラボでは、30年以上も続く「花壇づくり」や「資源回収」はもちろん、地域の力を授業等に取り込む様々な工夫を行っている。その企画・運営の中心になるのは、コラボ・スクール推進委員の皆さんだ。本校の心強い応援団である。

今年度、本校は「優れた地域による学校支援活動に係る文部科学大臣表彰」をいただいた。地域連携は、本校の命。この成果を噛みしめ、本校は一層前へ進んでいきたい。



キャリア教育

高校で学ぶ、高校生に学ぶ

大仙市立大曲小学校 校長 毛利 博信

10月中旬、6年生児童128名が大曲高等学校を訪問した。総合的な学習の時間の『自分を見つめ夢をもち、その夢に向かう方途を探る』、全32時間中の1コマである。高校生活に直接触れさせ、間近に迫った中学校進学への期待や意欲につなげたいと考えたからである。また、中学校で頑張るべきことが、具体的に見えてきてほしいとの願いもあった。

授業参観の後、代表の児童と高校生によるシンポジウム。テーマは『なぜ勉強するのだろうか』。高校生の発言が素晴らしい。小学生が理解しやすい言葉で、小学生でも実践できるような内容に絞り話してくれた。「夢に向かい、今努力していることは？」との問いに、「人と関わる仕事がしたいので、誰にでも明るい挨拶を心がけています」「ミスは許されない仕事に就きたいので、授業中先生の話をしっかりメモするよう努めています」。アドバイスを受け、「今できることは何か」を自らに問い始めた小学生の表情は、訪問前とは明らかに変化していた。

今年度は、大曲高等学校に加え、大曲技術専門校からもご協力をいただいた。今後も、地域の教育力を一層生かしていきたい。



ふるさと教育の特色ある取組

南外仕事着のファッションショー

大仙市立南外中学校 教諭 高橋 悠葵

平成26年2月「秋田南外の仕事着」が国の有形民俗文化財に登録されたことを受けて、本校は社会科の授業や総合的な学習の時間を活用して、ふるさと南外の仕事着の学習を行った。県民俗学会の齊藤壽胤先生に仕事着の特徴や文化財としての価値を学び、元文化財調査官菊地健策先生からは登録に至った経緯を教えていただいた。

これらの学びを地域の方々にも知ってもらおうと、文化祭で春夏秋冬の仕事着の特徴をショー形式で演出する「南外仕事着のファッションショー」を実施したところ、写真のように多くの方々に参加してくれた。当日はご当地アイドル、プラモの出演もあり、大変な盛り上がりを見せたが、プラモに負けじと発表や運営を頑張った生徒たちにも惜しみない拍手が贈られた。子どもたちのきらきら輝く達成感に満ちあふれた笑顔が忘れられない一日となった。





環境教育研究指定校事業（市教育委員会）

東北地方ESD奨励賞受賞

地域に根ざす環境教育

大仙市立藤木小学校 教頭 井上 利光

今年度、大仙市環境教育研究指定校事業の指定を受け、研究を進めてきた。

環境保全については、学校や保護者だけではなく、地域と共に考えていく必要がある。そして、子どもたちが、地域について知り、関わりを深めていくことで、環境保全に対する意識が高まるものと思われる。そこで、ESD（持続可能な開発のための教育）の理念に基づき、環境ESDカレンダー（各教科等の学習内容等の関連図）の見直しとそれに基づく実践を行ってきた。

主な活動としては、「緑のカーテン」、「ドリームワールド」、「エコキャップ運動」、「親水公園一斉クリーンアップ」、「小中合同クリーンアップ」、「水生生物や水質の調査」等が挙げられる。今年度は更に、藤木小学校出身の大曲農業高等学校の生徒と職員の皆さんにお手伝いいただき、学級園の畝作りや野菜の植え付けを行い、高校との連携も深めることができた。

これまでの取組が認められ、11月に東北地方ESD奨励賞を受賞した。このような取組を通して、子どもたちは、今まで以上に身の回りに関心を持ち、植物や動物、人に対して優しく接するようになったと感じている。



ふるさと体験学習推進事業（市教育委員会）

ふるさと大仙のよさを発見！

大仙市立角間川小学校 教諭 菅原 清三

平成26年度、「ふるさと体験学習推進事業」に6年生21名が1泊2日の日程で参加し、次のような体験活動を行った。

1 実施した体験活動

- 1日目
  - 野菜の収穫
  - 昼食：おにぎり作り
  - 山小屋での薪割り
  - 夕食：郷土食作り
- 2日目
  - 野菜の収穫と餅つき
  - 昼食：おやき作り



2 児童の様子と成果

3軒の農家民宿（角間川2軒、内小友1軒）にお世話になった。どの民宿も子どもたちを温かく受け入れ、家族のように接して下さった。

活動後の体験記には、「つくる喜び」「できた喜び」「人の温かさ」「自然のすばらしさ」などの言葉が多く見られた。子どもたちにとって、ふるさと大仙のよさを実感する貴重な機会となった。



大仙市中学生サミット（市教育委員会）

大仙市の未来は私たちがつくる

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 島田 智

平成19年から開催されている大仙市中学生サミットは、今年度大曲中、大曲西中、大曲南中が事務局校となり、「REVOプロジェクト」を継承しながら、「大仙市の未来は私たちがつくる」を共通テーマとし、未来につながるアクションを起こすことを目標に取り組んだ。

8月21日（木）に大曲中学校多目的ホールを会場に行われた第13回大仙市中学生サミットでは、はじめに中仙中、豊成中、仙北中、太田中から各校の生徒会の取組が紹介された。各校とも地域と連携した生徒会活動を展開していることがわかった。

次に「REVOプロジェクト」「いじめ撲滅」「地域との連携」の三つの分科会に分かれて、自分たちの学校では何ができるのか、サミット全体では何ができるのかを真剣に話し合った。その中で、「いじめ撲滅」部会から、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）について、学校ごとに自分たちでルールをつくる提案が提案され、その後、平和中のルールづくりを参考に、各校でルールづくりに取り組んだ。



だいせん防災教育「生き抜く力育成」事業（市教育委員会）

地域と連携した避難所開設訓練

大仙市立大曲西中学校 校長 茂木 譲

災害時に、地域の一員として自ら判断し、主体的に行動できる生徒を育成することをねらいとし、地域との連携を図りながら次のような訓練を行った。

1 訓練の概要

9月4日午後2時30分、大曲地区を震源とする震度6の直下地震が発生したという想定の下に行われ、地域住民や市関係者、市内小・中学生と教職員約200名が参加した。生徒の人員確認と被害状況の報告を受けて、直ちに避難所開設を指示し、生徒と教職員は総務班や施設安全班等7班に分かれて活動を開始した。



2 成果

- (1) 事前学習で、自分たちにできることを考えさせたことが、生徒の主体的な活動につながった。
- (2) 学校として、「慎重かつ素早く、誠意をもって、組織で対応する」ことが実践できた。
- (3) 地域の自主防災組織に移行する目途がたった。

3 課題

- (1) 生徒の防災リテラシーを高め、「想定外」に対する危機対応力を育成する必要がある。
- (2) 地域や関係機関との連携を深め、防災備品点検、避難所機能の強化に努める必要がある。



コロンブスの卵わくわくサイエンス事業（市教育委員会）

「科学」はすぐそばにある！

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 島田 智

本事業では、“理数教育の充実”を図るため、教職員対象の「観察・実験授業スキルアップ出前研修」と、中学生対象の「中学生首都圏大学・総合研究所派遣」の二つを実施した。

1 観察・実験授業スキルアップ出前研修

「児童生徒の知的好奇心を高める理科の授業を行うために、観察・実験を通して科学への疑問について感じ、考え、実感できる授業づくり」を目指し、秋田大学の教員、総合教育センターの指導主事、教育専門監を講師として、理科の指導力の向上を図る研修を実施した。本研修では、全12回の出前研修に延べ219名の教員が参加して研修を深めた。その内の3回は、サイエンス・パートナーシップ・プログラムの一環として、秋田大学教員による児童を対象とした出前授業を参観する研修を実施した。その他の秋田大学教員の講座では、身近な材料を使った効果的な実験の方法を体験しながら研修し、総合教育センター指導主事と教育専門監の講座では、問題解決学習の授業構成等について研修した。



2 大仙市中学生首都圏大学・総合研究所派遣

今年度は8月5日（火）～6日（水）に、中学生18名が参加して実施された。

1日目は千葉市暮張メッセで開催された「宇宙博2014－NASA・JAXAの挑戦－」を見学し、これまでの宇宙開発や、未来に向けた日本の宇宙技術を学んだ。

2日目、千葉大学医学部コースでは、細菌学の世界的権威である野田公俊教授が、大仙市の中学生のために特別講座を開設してくださった。講座の中では、連鎖球菌等の観察も行った。

日本科学未来館・産業技術総合研究所コースでは、超伝導やビタミンCで発電する燃料電池の実験を行った。

最先端の施設で日本の科学技術や研究レベルの高さを直接感じ取ることができた生徒たち。参加者からは「科学は奥深くておもしろいと改めて感じた」「将来、医療関係に関わる仕事をしたいという気持ちが一層強くなった」などの感想が寄せられた。参加者の中から将来優秀な科学者が生まれ、世界の科学を牽引することを願っている。



大仙市立中学校生徒海外派遣事業（市教育委員会）

大自然の中でたくましく成長

大仙市立中仙中学校 教諭 五十嵐 佳子

大仙市内の20名の中学生と共に海外で研修する貴重な機会をいただき、真冬の秋田から真夏のオーストラリアへと出発した。行きの飛行機の突然の欠航やファームステイ先での連日の雨など、予想外の出来事もあったが、約1週間生徒たちと過ごす中で、多くのことを吸収しようとするたくましい姿を様々な場面で見ることができた。

ホストファミリーと英語で積極的に会話する姿、オーギーキッズとあつという間に仲良くなり様々な活動を楽しむ姿、現地で働いている日本人に質問し自分の将来に役立てようとする姿など、この研修で何かを得て日本にもち帰ろうとする意欲が感じられた。

また今回、それぞれが自分の研究テーマを決め、事前にふるさと大仙市のことを学習した上で海外研修に臨むなど、事前の準備がしっかりしていることが、単なる観光とは違う、目的意識をもった研修につながっていると感じた。

この海外派遣の経験が、生徒たちの心に何か変化をもたらし、将来により影響を与えることを願っている。



「大仙っ子 読書の日」に係る取組事例

読み聞かせ活動の充実を図って

大仙市立内小友小学校 教諭 高橋 里美

読書活動が活発な本校であるが、読み聞かせの機会の拡大や内容の工夫を行うことで、活動の充実に取り組んできた。

(1) 図書ボランティア「ぼけっとさん」や図書支援員による読み聞かせ

体育館や音楽室、図書室など校内の様々な場所で多様な読み聞かせを行い、本の楽しさやおもしろさを伝えている。



(2) 「ミニぼけっとさん」による読み聞かせ

委員会主催で「ミニぼけっとさん」による読み聞かせ会を行っている。今年度は保育園児も対象に読み聞かせを行い、交流の輪を広げることができた。



(3) 「親子読書」の呼びかけ

「大仙っ子読書の日」の一環として、カードを利用した親子読書に取り組み、家庭での読書活動を積極的に進めている。

また、「読み聞かせ推進校」として国文祭に参加し、「音楽とのコラボレーション」で新しい読み聞かせの形を紹介することができた。



第29回 国民文化祭・あきた2014

ようこそ大仙市へ  
ようこそ旧池田氏庭園へ

大仙市立高梨小学校 教諭 菅原 美奈子

「白い雲がゆくよ 真昼山をこえて～」さわやかな秋晴れの下、3年生の元気な歌声が、旧池田氏庭園に響き渡った。「国民文化祭・あきた2014」のイベントに参加させていたでいてのことである。

国指定名勝「旧池田氏庭園」は、本校の子どもたちにとって自慢の場所だ。その大好きな庭園においでくださったお客様を歌と合奏でお迎えしようと、一生懸命練習してきた。そして本番の日。たくさんのお客様の前で、先輩たちが歌い継いできた伝統ある校歌を堂々と歌い上げた。「気持ちよかったね。」「緊張しちゃったよ。」と口にするその顔は、うれしさと自信で輝いていた。

「こんにちは。」「ようこそ、いらっしやいました。」歌の後には、4年生と一緒に、明るいあいさつや大仙市のよさを紹介した手作りのしおりをプレゼントし、お客様にとっても喜んでいただいた。

お客様との笑顔あふれるふれ合いを通して、ふるさとを誇りに思う心が大きく膨らんだこの日は、まさに実りの秋にぴったりの一日になった。



市PTA連合会

学校と家庭と地域を「つなぐ」

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 佐藤 信夫

大仙市PTA連合会は、今年度も「中学生サミットへの参加」「あいさつ運動」「ノーマディアデーの推進」等、積極的な活動を展開してきた。

また、年間3回の研修会も多くの参加者のもと、充実した成果を得ることができた。研修会の概要は、次のとおりである。



回	実施日・会場	概要
16	12月15日(月) 南外小学校	授業参観と「We Love ♥ 南外おらだの学校スペシャル」に係る地域連携の取組紹介
17	1月7日(水) ふれあい文化センター	講演会 講師・原田 真裕美氏 (羽後町立図書館長) 「子どもたちが輝く読書活動」
18	2月13日(金) グランドパレス川端	児童生徒の学力等の状況 食物アレルギー対応 情報モラルいじめ対策の協議

本会も発足から7年。地域や家庭の生の声に耳を傾け、他の学校の取組を本校の教育活動に生かすことが「当たり前」のように定着してきている。このことは、本市の新しい教育財産の一つでもある。今後とも、学校と家庭の思いと願いを「つなぐ」活動を大切にしていきたい。

はいさい・めんそーれ沖縄・大仙子ども交流事業 (市教育委員会)  
(こんにちは) (ようこそ)

交流を通して、互いのよさを発見！  
(糸満市教育委員会「学びの体験事業」の受け入れ)  
大仙市教育委員会 教育研究所長 須田 百合子

10月22日(水)から24日(金)までの3日間、糸満市教育委員会の「学びの体験事業」が実施され、本市教育委員会はその際の交流活動を「はいさい・めんそーれ沖縄・大仙子ども交流事業」で支援した。(※「はいさい・めんそーれ」は沖縄の方言で「こんにちは・ようこそ」)

糸満市からは、小学生20名、中学生12名に教員等23名が訪問し、太田南小学校と太田中学校で授業を体験するなど交流を深めた。



1日目は、午後の到着となり、旧池田氏庭園を見学してから宿舎の奥羽山荘に入った。2日目、太田南小学校では郷土料理作りやグラウンドゴルフ交流会、太田中学校では、校内

内伝・マラソン大会やなべっこ会が行われた。3日目には太田中学校で全校で平和学習を実施するなど、それぞれの特色ある学校行事を織り交ぜ、充実した学習や交流が展開された。



糸満市の児童生徒や教職員から、太田の児童生徒の落ち着いた生活や、授業への積極的な姿勢などを評価する感想をたくさんいただいた。また、太田の児童生徒や教職員にとっても糸満市の児童生徒の豊かな表現力、伝統文化に自信をもった姿など、たくさんのお話を学ぶ機会になった。

情報モラルいじめ対策事業 (市教育委員会)

安全・安心のインターネット利用を目指して

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 大阪 瑞穂

児童生徒が、情報化社会で適正な活動を行うための基になる考え方を理解し、インターネット等によるトラブルやいじめ等を未然に防止する能力、及び効果的に対処する能力等を養うことや、保護者への情報モラル教育の啓発を図ることを目的に、今年度から本事業がスタートした。

大仙市全ての小・中学校に情報モラル教育の講師(千葉薫氏:総務省・文部科学省他共催事業e-ネットキャラバン推進協議会認定講師、県教育委員会インターネットセーフティ推進委員等)を年1回派遣し、インターネットを利用する際のルールやトラブルの具体例等について講話をいただいた。

講話後の児童生徒や教職員の感想には、「便利さだけでなく危険性についても理解でき、気をつけて利用したい」「児童生徒と保護者が一緒に聞いたことで家庭での共通の認識ができた」などの好評価の声が数多く聞かれた。



今年度、本市ではインターネット上での大きなトラブルは発生していない。しかし、携帯電話やスマートフォン等の所持率は年々増加傾向にあり、低年齢化している。

今後も、児童生徒が安全で安心な利用ができるように、学校と家庭、関係機関との連携を図りながら、情報モラル教育の充実を努めたい。

特別支援教育支援充実研修会（市教育委員会）

## 授業における ユニバーサルデザインの ポイントとは？

大仙市教育委員会教育指導課 指導主事 櫻田 武

8月8日の特別支援教育支援充実研修会には、生活支援員と学級担任等の教員合わせて84名の参加があった。はじめに、「児童生徒の自立をうながす手立て」と題して横手養護学校の佐々木義範教育専門監から講話をいただき、次に「ユニバーサルデザインの授業」について、市教育委員会から次のような提案をさせていただいた。

2012年に実施された文部科学省の調査では、通常の学級における特別な支援を要する児童生徒の割合が6.5%であることが分かっている。（小学校1年生では9.8%）そこで、全ての児童生徒が「わかる」「できる」授業を考えると、ユニバーサルデザインの考えがとても役立つ。市内の学校で、先進的な取組をしている花館小学校と西仙北小学校、中仙小学校の実践から、主なポイントを紹介したい。

### 1 授業のユニバーサルデザインとは？

障害の有無や学力の優劣を問わず、どの子ども「わかる・できる・楽しい」授業のデザイン

### 2 ユニバーサルデザインの授業づくりのポイントとは？

- (1) 「めあて」を全員がわかる
  - ・全員が「できた」達成感を味わえるように、本時や単元のゴールを具体的なめあてにする。
- (2) 「今何をやっているか」がわかる
  - ・本時の学習内容だけに集中できるように、机上や机周り、黒板周り等の環境をすっきり整える。
- (3) 「視覚的」にわかる
  - ・絵図、写真、ICT等の活用、板書やノートの構造化、手順や終わりの時刻の明記等を行う。
- (4) 「わからないときにどうすればいいか」がわかる
  - ・分からないときに友達に聞いたり、自分の考えを友達に話したりできるような、学び合う時間を設ける。
  - ・学校の中には暗黙のルールがたくさんある。それらを一つ一つ、子どもたち、教職員、そして全校で共有し共通理解していくことが、ユニバーサルデザインの第一歩ともいえる。



第16回教職員研究集会 全体会フォーラム

## 「グローバル化に 対応した外国語教育の充実」 ～小・中・高・大の学びのつながりを通して～

大仙市教育委員会 教育研究所長 須田 百合子

第16回教職員研究集会は、昨今話題の多い「外国語教育」に焦点を絞るとともに、昨年度のキャリア教育の研修を更に深めるという視点も踏まえ、「グローバル化に対応した外国語教育の充実」というテーマで研修を行った。

小学校の外国語活動担当教員、中学校と高校の教育専門監（英語）からの実践発表の後、神戸製鋼株式会社人事労政部の望月亮佑氏から、「企業が求めるグローバル人材と学校教育への期待」という題で講話をいただいた。

その後、国際教養大学の町田助教のコーディネートにより、発表者によるパネルディスカッションが行われ、今後求められる人材について、それぞれの立場から意見が出された。

グローバルな人材を育てるためには、学びが各校種間において、円滑につながっていくよう、それぞれが出口と入り口を確認し合う必要があること、そして、グローバルであるためには、むしろローカルを充実させることが大事であり、ふるさとを愛する子どもたちを育てていくことが大事であるということが確認された。



## 平成26年度教育研究所のあゆみ

### 1 大仙市教職員研究集会

- ①第15回大仙市教職員研究集会（H26.4.28）
  - 教育長講話 □特色ある取組発表
- ②第16回大仙市教職員研究集会（H26.8.8）
  - 職務別等研修会（午前）
    - 生徒指導主事研修会
    - 特別支援教育支援充実研修会
    - 教科研修会（外国語教育）
  - 全体会（午後）
    - 小・中学校、高校の実践発表（外国語教育）
    - 講話
    - パネルディスカッション

### 2 学校訪問

- ①教育委員等訪問…市教育委員会や各学校の教育方針等の共通理解
- ②教育長等訪問…学力向上、「総合的な学力」の育成、生徒指導上の課題への対応等について状況を把握し、改善の手立てなどを確認

### 3 学力向上

- 全国や県の学習状況調査の分析結果を提供
- 学力向上推進委員会の活動として、国や県の学習状況調査分析結果に基づいたフォローアップシート等の作成と提供

### 発行 大仙市教育研究所

〒014-8601 秋田県大仙市大曲上栄町2-16  
TEL：0187-63-9400 FAX：0187-63-9401  
E-mail：om-kyouken@edu.city.daisen.akita.jp